保育に於ける生活ばなし

上澤謙二

まず、このお話を讀んでください。

新子ちやんは、はじめて幼稚園へきました。きようから、幼稚園へあがるのです。これから、幼稚園のこどもになるのです。

新子ちやんをつれてきたお母さんは、いそがしいので、先生におたのみしてかえりました。それで新子ちやんはひとりになりました。

お庭はひろくて、大ぜいのこどもがあそんでいますが、知つているお友だちは、ひとりもありません。

それから、おへやへはいりました。おへやには、いろいろなものがありますが、何をしていいか、わかりません。

けれども、新子ちやんは泣きません、おうちへかえろうなどとしません。

先生がおつしやいました。

『新子ちやん、えらいわね、何かしますか』

新子ちやんはいいました。

『わたし、何していいか、わからないの』

そうすると先生はほかのこどもたちにおつしやいました。

『新子ちやんは、きようはじめて幼稚園へきたので、何をしていいかわからないのです。だから、だれか、新子ちやんにすることをおしえてあげてね。そうして、新子ちやんのお友だちになつてあげてね』

そうすると、新子ちやんのわきにいた三ちやんがいいました。

『じやあ、ぼく、おしえてあげよう。そうしてお友だちになろう』

三ちやんは何をもつてきたでしよう。三ちやんは積木をも

つてきました。
『これね、積木。これで、おうちでも何でもつくれるよ』
そうすると、新子ちやんのそばにいたマチ子ちやんがいいました。
『じやあ、わたし、おしえてあげよう。そうしてお友だちになろう』
マチ子ちやんは何をもつてきたでしよう。マチ子ちやんはお人形をもつてきました
『これね、お人形。これ、だつこしたり、おんぶしたりできるの』
『それから、だれか、新子ちやんに何かおしえてあげられますか』
そういつた先生は、半ちやんをよびました。
『半ちやん、何か、おしえられる?』
『ええ、おしえられます。そうして、ぼくもお友だちになります』
半ちやんは何をもつてきたでしよう。半ちやんは紙とクレオンをもつてきました。
『これね、紙。これね、クレオン。これで、たくさん、畫がかけるよ』
そうすると、チヨ子ちやんがいいました。
『先生、わたしもおしえられます。そうしてお友だちになります』
チヨ子さやんは何をもつてきたでしよう。チヨ子ちやんは繪本をもつてきました。
『これ、繪本。これを見ると、いろいろなものがかいてあつて、おもしろいわよ』
そうすると、順ちやんがいいました。
『じやあ、ぼくもおしえてあげよう。そうしてお友だちになろう』
順ちやんは何もをつてきたでしよう。順ちやんは粘土をもつてきました。
『これね、粘土　これでね、何でも、すきなものをつくれるよ』
そうすると、ミヨ子ちやんがいいました。
『じやあ、わたしもおしえてあげよう。そうしてお友だちになろう』
ミヨ子ちやんは何をもつてきたでしよう。ミヨ子ちやんは折紙をもつてきました。
『これね、折紙。これで、いろいろなものを折つてこしらえるの』
そうすると、金ちやんがいいました。
『じやあ、ぼくもおしえてあげよう。そうしてお友だちになろう』
金ちやんは何をもつてきたでしよう。金ちやんは金槌と、釘と、鋸をもつてきました。
『これ、金槌、これ、釘、これ、鋸。これで、木をうちつけたり、板をひいたりするんだよ』

そうすると、先生がおつしやいました。
『新子ちやん、ずいぶん、お友だちができましたね。ここにいる人、みんな、あなたのお友だちよ』
新子ちやんは大きなこえでいいました。
『先生、わたしもみんなのお友だちになつたの』
先生はにこにこしながらおつしやいました。
『そうそう、新子ちやん、えらいわね。あなた、もう、みんなのお友だちになつたのね。それでは新子ちやん、何かしますか』
『先生、わたしはみんなします』
新子ちやんがまた大きなこえでいうと、先生はわらいながらおつしやいました。
『だつて、一度にみんなできないわね。何からさきにしますか』
『そうそう、何からさきにしよう』
新子ちやんは立ちあがつて、方々を見ました。新子ちやんは何を見たでしよう。
新子ちやんは、三ちやんが積木で塔をつくつているのを見ました。ほら、一つ乗つかつた。また一つかさなつた。だんだん高く、もつと高く。
それから、マチ子ちやんがお人形をだいて、歌をうたつているのを見ました。『ねんねんよう、ねんねんよう、坊やはよい子だ、ねんねしな』
それから、半ちやんが畫をかいているのを見ました。クレオンがうごくと——赤い花がかける、青い葉つぱがかける。
それから、チヨ子ちやんが繪本を見ているのを見ました。ひとうきがとんでいる、じどうしやがはしつている。
それから、順ちやんが粘土でつくつているのを見ました。ベタベタとねたり、グルグルまるめたり、お皿ができる、おだんごができる。
それからミヨ子ちやんが折紙を折つているのを見ました。そろえたり、たたんだり、鳥ができる、けものができる、人もできる。
『わたしは積木をします』
新子ちやんがいうと、先生はまたにこにこしながらおつしやいました。
『ひとりでするの、新子ちやん、えらいのね』
やりはじめた新子ちやんは、たくさんかさねました、高く高く——。そうすると、ガラガラツとくずれました。それからまたかさねました。高く、高く、高く——。そうすると、またガラ、ガラ、ガラツとくずれました。けれども、またかさねました。またくずれました。何度かさねて、何度くずれたでしよう。
けれども新子ちやんはつづけました。もうはじめて幼稚園へきたことはわすれて、いつしようけんめいつづけました。
どうしてでしよう。
お友だちがたくさんできたからですね。そうして、何をしてよいか、よくわかつたからですね。

……毎日の保育に於けるお話には、いろいろな種類のものが話さるべきことは、いうまでもありません。創作童話、昔ばなし、自然ばなし、科學ばなし、傳說、民話すべて結構です。が、保育の立場から特に注意すべきは、生活ばなしでしよう。

生活ばなしとは、直接子供の生活を題材にしたお話であります。生活のうちに見出だされ、生活に卽して構成され、生活に從て取扱われるお話であります。『子供の生活の中から生まれたお話』といつてもよいでしよう。

それを『特に注意すべき』第一の理由は、保育というものの性質からであります。保育が他の敎育と違つて『保育』である所以は、それが生活敎育だからであります。保育は何を通じて行われるかといえば、規則でも、命令でも、敎授でもない、實際の生活を通じてであります。先生と園兒と、又園兒と園兒と共に生活するところに、保育が成り立ち、働き出し、發展していきます。生活を除いて、生活を離れて保育はありません。從て保育に於けるお話も、子供の生活そのものに關連し、密接し、融合することが多ければ多いほど、深い意味と使命を持つことになりましよう。

『特に注意すべき』第二の理由は、保育の場である幼稚園乃至保育所の性格からであります。そこでは、先生と園兒が毎日遇います。そうしていつしよに遊び、學び、歌い、食します。しかもそれが一年以上もつづきます。こんなに親しい關係に於て、こんなに繼續した時間に於て、更にこんなに計畫された敎育的還境に於て、先生と子供が生活を共にすることは、外にないでしよう。だから幼稚園乃至保育所は、子供のありのままの生活を觀察し、調査し、檢討する絕好の場といえましよう。

『特に注意すべき』第三の理由は、お話というものの作用からであります。子供がお話にひきつけられるのはいろいろなわけがありますが、その一つは、深淺多少の差はあれ、そこに『自己』を發見するからです。勿論自分そのものが出ているのではありませんが、自分の性質や傾向や、又は希望や要求や、又は問題に對する指導や、疑問に對する解決などが、さまざまな人物や事件によつて現わされているのです。だからその『自分』は間接であり客觀的なのですが、それだから暗示的となり自然感化的となつて、かえつて興味を喚び、共鳴を起し、印象を深めるので、そこがお話の微妙な獨壇場であります。そこで、間接であり客觀的でありながら、最も近い親しいお話は何かといいば『自分の生活の再現』が內容となつたものでしよう。

『特に注意すべき』第四の理由は、その時期即ち幼兒期の兒童の心理からであります。彼等の見聞經驗は淺く、從て人的活動の範圍は狹いので、餘り複雜した構成や婉曲な表現を持つお話に對すると、その奧に潛む『自己の姿』を發見することはむずかしいのです。自分に最も近い又深い關係を持つ生活が取扱はれているお話が、最も强く訴えます。それから彼

等は、お話の中で、自分の知つているものに出會うことに、この上もない喜びを感じます。所謂再認識の喜びというのがそれですが、自分がよく知つている幼稚園乃至保育所關係の生活が直接間接に再現されるお話に對して、この喜びがより多く觸發されることはいうまでもありません。そこに現われてくるのは我の影、我の姿、我の面かげではありませんか。彼等がそういうお話と強く結びついて、深い感化を受けることとは當然でしょう。

以上のような理由から、保育に於て、生活ばなしが『特に注意される』ことになるのであります。

さて、冒頭に掲げたお話は生活ばなしであります。

これは、新入園兒を中心とした生活から材料を得、その生活のありのままに即して構成され、その生活の實際に沿つて話されたものであります。

嘗て私は、自分の幼稚園の新しい保育期の初めに、このようなお話をしたところが、古い園兒たちは非常な興味をもつて迎え、又新入園兒たちに對して園の生活に親しみと勇氣を增す一つの階梯になつたことが看取されたので、それから新入園兒があつた時は、よくこのお話をして、同じような結果を得ました。

ところが、最近讀んだアメリカのミッチエル女史が著はした『いまことばなし』の中の『お庭が見えろ窓があるお部屋』というお話が、それと殆ど同じような內容を持つているのを見て、おどろきもし、よろこびもした次第です。それでそのお話からよいところを拜借して、從來の私のお話のまずいところを補い、改めて作つてみたのがそれなのです。

それにつけても、保育に於ける所謂生活ばなし的な行き方は、アメリカの專門家の間にも取上げられているのを見て、まことに心强く感じたのでした。

このお話の構成や取扱方について、一言つけ加えておきましょう。

その目的は、子供たちに社會的な協同協力の生活を示し、それに對する實際的な興味と意欲とを喚起しようとするところにあります。それには、園內の現實生活ですから、最も具體的經驗的で、ピンと來るにちがいありません。從て實際的な興味も意欲も、より强く鮮かに喚起されるにちがいありません。しかもその興味と意欲を實行に移し得る機會は目前に横たわつていて。いつでも行われ得るのですから、正に理想的であります。これも生活ばなしの一つの特徵といえましょう。

社會的な協同協力の生活というのは、この場合、古い園兒にとつては自分の知つていることを相手に教えてやること、その配慮と手數を通じて相手に幸福を與えることであり、新入園兒に取ては、元氣と勇氣をもつて新しい環境に對處すること、教えられることを注意して受け、熱心をもつて行ない自分の世界を擴充していくことであり、それが發展してお友

だちになるというよい結果を、相互に齎らすことであります。

態度としては、飽くまでも客觀的な事件として話すこと、出てくる子供たちも、全然第三者として取扱うことです。材料も直接その場のことであり、人物も直接そこにいるものなので　ともすると、その場のその子供たちのことを話すような氣持になり態度になり兼ねないのですが、そうなると『お話』でなくなつて、その場又はその子供に關する報告になり說明になり、或は批判になつてしまいます。かくては聽者にとつては、關係は直接になつて一種の利害感を生じ、特別な緊張や、配慮や、好惡が働き出して、おちついて、味わつて、面白がつて聽くという心理又は態度がなくなつてしまいます

お話はその精神に於ては、實に聽者に親しい直接なものですが、その形式に於ては全然客觀的で間接なものであることを殊に生活ばなしの場合には、話者は忘れないようにありたいものです

話方としては、問答が多いので、音聲に注意すること。一人々々の調子を、わざわざ作り聲までして違えることはいりませんし、又好ましくもありませんが、勘くとも先生と園兒の話しぶりくらいは違わないと、表現が平板になるばかりでなく、兩者の區別がぼんやりして、お話全體が曖昧になつてしまうようなこともあるでしょう。しかしそのくらいの違いは、その度毎に一々努力しないでも、話者がそのお話にはまりこんでいれば、自然に出てくるにちがいありません　元來その事件が毎日實際に遭遇していることなのですから。殊に先生にとつては自分自身のことなのですから。

お話の中で、三ちやんとマチ子ちやんが新子ちやんに敎えて、三番目に、先生が半ちやんを呼ぶところがありますが、この邊で、『何をもつてきて敎えますか』と、子供たちに質問して、その答によつてお話を進め、それを繰返して、出來るだけ多くの子供にいろいろなものをいわせることは適當でしよう。かくすることは、子供たちの思考力表現力を働かせてその發達を助け、又園內の事物を自發的に再認識して、園及園の生活に一層なじむことになるからです、そうして更にそれによつてお話に參加する喜びを味わい、自己の能力に對する自信を加えるようになるからです。

少しく注意すれば、親しく子供たちに接している保育者は彼等の言語、會話、行動の中から、お話に應用し得る材料を屢々發見することができるでしよう。保育者こそは正に生活ばなしの理想的な作者としての位地に置かれる者といつてよいでしよう。

〔附記〕「いきことばなし」は、波多野完治先生のおかげで讀むことができたものです。同書については同先生が、本誌第四十六卷第九號で紹介されました。